

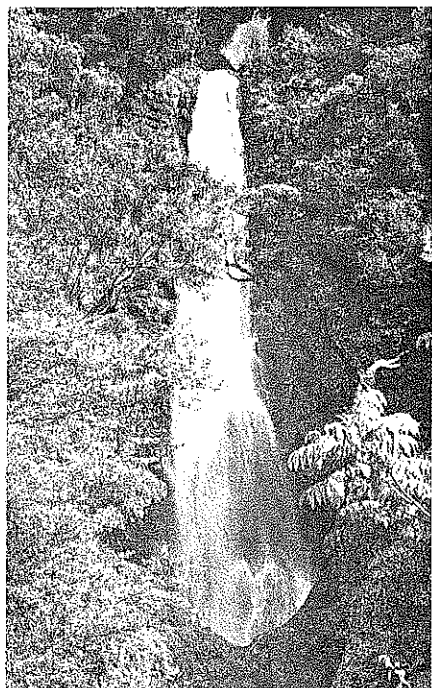
六 心をひらいて

西郷村の民話から

むかしむかし、西郷村のおせりの滝の近くの村では、お祭りやおいわいごとで使
うおぜんやおわんなどの道具一式を、「おせりさん」（おせりの滝の神様）からかり
ていました。村人は、お祭りやおいわいごとが近づくと「おせりさん」に出かけて
いき、

「もうすぐお祭りです。どうぞ、おぜんとおわんを十人前かしてください。」
などと、おねがいするのです。

そして、次の日朝早く「おせりさん」へ行
くと、やしろのうらの青々とすみきった池の
ふちに、おねがいはした数のおぜんとおわんが
ぶかぶかういているのです。そのおぜんと
おわんはぴかぴかに光った、それはそれは



りっぱなものでした。村人は、おいわいごとがすむと、ごちそうをおそなえして、そのおぜんとおわんをきちんと返していたのです。

ある年のお祭りの席せきのことです。ごちそうを食べ、お酒さけをいっぱい飲のんでいい気分せうきちになっていた総吉は、うっかりおぜんに手をついてしまいました。すると、「グキッ。」と変な音がしたのです。はっとしてあわてておぜんをあしをさわると、なんとおれているではありませんか。

総吉は、

「これはしまった。大変なことをしてしまった。どうしよう。」

と、思いました。まわりの人に言おうと思いましたが、まだ、だれも気づいていません。そこで、ご飯つぶでくつつけて、そうっと返してしまいました。



ところが、数日後、総吉は、とつぜん熱を出して苦しみ出したのです。熱が、何日も続くので、村人も心配して、いろいろな薬を飲ませましたが、いつこうにききめがありませんでした。

やがて、一年がすぎ、また、お祭りが近づいてきました。村人は、いつものように「おせりさん」におねがいごとをしました。しかし、次の日の朝、おせんやおわんをとりにいきますと、池には何もうかんでいません。今まで、こんなことは一度もなかったので、村人はとてもおどろきました。

このことを聞いた総吉はなやみました。

「おせりさん」のおせんが出てこないのは、自分のせいにちがいない。

でも、そのことを今ごろになって村人に言ったとしたら、何と思われるだろう。

しかし、だまっていることは総吉にとって、とても苦しいことでした。

総吉は思いきって村の人々に、おせんのあしをおって、そのまま返したことをう

ちあけました。

総吉は、病氣のからだを村人にささえられながら、「おせりさん」に出かけていきました。そして、おぜんのおしをおってしまったこと、今までだまっていたことを「おせりさん」に深く深くあやまりました。

すると不思議なことに、総吉の病氣はだんだんよくなり、やがてもとのような元気なからだにもどったということです。

